

# 日本統治期台湾におけるハンセン病対策

## — 台湾総督府と私立ハンセン病療養所の関係から —

芹澤 良子

### 1. はじめに

本稿では、日本統治期台湾で行われたハンセン病対策<sup>1</sup>について、台湾総督府と私立ハンセン病療養所の関係から、その特質を見出すことを目標とする。

まず、これまでのハンセン病研究について簡単にまとめた。日本国内の元ハンセン病患者（回復者）は、病気が完治した後も、法律の下で療養所に隔離され続けてきた。法律による隔離が廃止されたのは1996年、今から10年程前のことである。そして、2001年には熊本地裁において「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟に原告側が勝訴した<sup>2</sup>。ハンセン病の問題は、「隔離」や「人権」といった要素が強い性質上、人権問題を中心に多くの研究が進められ、裁判に代表されるような成果を生み出してきたといえる。

台湾のハンセン病政策についても、同じように人権の問題を中心に、台湾総督府立ハンセン病療養所、私立ハンセン病療養所などに関する研究、救済に携わった人に対する伝記などの先行研究が行なわれている<sup>3</sup>。日本統治期の隔離政策をめぐる裁判<sup>4</sup>、そして、台北市外を結ぶ地下鉄工事に伴う移転問題など<sup>5</sup>、近年、様々な問題が発生し、台湾のハンセン病研究もまた、このような状況の中で発展したといえる。

本稿では、台湾総督府と私立ハンセン病療養所の関係論について整理、分析を行う。筆者は、私立療養所とその園長であるグッシュテイラー（George Gushue – Taylor 中国語：戴仁壽）の存在を日本統治期、台湾におけるハンセン病対策の特徴の一つと考えている。台湾総督府と私立療養所の関係論から論ずることで、台湾のハンセン病対策の特質を見出したい。これまで、関係論という視点から台湾のハンセン病政策を捉えるといった試みは行なわれていない。その理由を考察してみると、日本からの視点では、日本の延長線上として植民地台湾のハンセン病政策を捉えることが多かった。それゆえ、日本と同じ点に視線が注がれ、台湾総督府と私立療養所の関係という点には、関心が向けられなかったのだと考えられる。また、台湾からの視点で考察すると、クリスチャンミッションによる医療伝道は、日本が植民地統治を開始する以前の1865年より行われており、クリスチャンミッション経営の病院

は普遍的なモノとして存在していた。それゆえ、私立療養所の存在意義に注目されなかったものと考ええる。台湾総督府と私立療養所の関係論は、日本からの視点と台湾からの視点の、死角にあった研究であり<sup>6</sup>、多角的な分析<sup>7</sup>によってはじめて浮かび上がる問題なのである。以下、具体的な事例をあげて台湾総督府と私立療養所の関係を整理したい。

### 2. 日本国内における私立療養所の状況

まず、日本国内における私立ハンセン病療養所の状況について簡単に述べる。1907年「癩予防に関する件」が公布され、1909年に道府県立の療養所が設立する以前は、クリスチャンミッション経営による救済が中心であった<sup>8</sup>。しかし、ハンセン病対策に積極的な人々の中から、外国人ではなく日本人の手でハンセン病患者を救おうとの意見が発せられるようになった<sup>9</sup>。そして、1931年「癩予防法」が施行される時期になると、道府県立療養所ないし国立の療養所がハンセン病患者の受け皿となっていくのである<sup>10</sup>。

戦前、日本には7ヶ所の私立療養所があった。草津に開設される2つの私立療養所以外は<sup>11</sup>、すべて1907年に法律が公布される以前に誕生している。法律施行後に開設する療養所に注目してみると、15箇所の内、13箇所が国公立の療養所の療養所である<sup>12</sup>。日本国内では、法律の施行とともに、国公立の療養所が建設され、これら療養所内の定員は漸次拡大され、患者たちは国公立の療養所へと隔離収容される、といった図式が作られた<sup>13</sup>。

### 3. 台湾におけるハンセン病治療

ここでは、台湾の状況について述べたい。日本統治時期台湾において、衛生政策が重視されたことはよく知られている。ハンセン病と関わりの深い疾病対策に限定していえば、ペストなどの急性伝染病や台湾の風土病であるマラリア対策が、初期段階の衛生政策として重視された。その後、これら疾病対策が一段落すると、慢性疾患対策が行なわれるようになったとされ、時期的には、昭和に入ってからといわれる<sup>14</sup>。確かに、ハンセン病療養所の建設や法制度化<sup>15</sup>といった具体策

が講じられたのは、昭和に入ってからであるが、実際にはもう少し早い段階から問題とされていた。実現には至らなかったものの、1920年頃に、台北、台中、台南の3ヶ所に療養所を建設する計画もあった<sup>16</sup>。その10年後の、1930年に台湾総督府立のハンセン病療養所樂生院が誕生した。

それでは、樂生院が誕生する以前、ハンセン病に罹った人々はどこでその治療を受けていたのだろうか。患者らは、台北医院などの公立の病院<sup>17</sup>、そしてクリスチャンミッション経営の私立医院で治療を受けていた。次節以降で詳しく述べるが、台北でクリスチャンミッションが経営する、馬偕医院に赴任したグッシュテイラーは、1925年より馬偕医院内でハンセン病患者の治療を始め、1927年には医院の向かい側にハンセン病患者専門の外来治療所を開設している。ハンセン病治療の専門化という点に限定していえば、クリスチャンミッションによる私立医院が先行したのであった。

#### 4. 私立ハンセン病療養所園長グッシュテイラー

私立台北馬偕医院でハンセン病の診察を行なった、グッシュテイラーについて簡単に触れたい。グッシュテイラーはカナダ長老教会北部台湾宣教師会所属の宣教師であり且つ、医師でもあった。1883年カナダで生れ、中学校の教員を経た後に、医学の道に進んでいる。ロンドンの私立医学校、医科大学を卒業した後に、1911年イギリス長老教会より台湾に派遣され、同年12月より1918年まで台南で診察を行った。医院では、診察および布教活動を行っている。つまり、グッシュテイラーは医療伝道の一環として、台湾に派遣されているのである。

1918年5月に一旦台湾を離れて、アメリカ、カナダ、イギリスで医学の研究を行い、1920年イギリス王室外科医学会より医学博士の称号が授与されている。その後、ロンドンの病院で3年3ヶ月院長を勤めた後、今度はカナダ長老教会から台北へと派遣されている<sup>18</sup>。グッシュテイラーは台湾に向かう途中にインドのカルカッタに立ち寄り、イギリスのハンセン病研究者である、イミュアル（Ernest Muir）が経営するハンセン病療養所を訪問し、教えを受けた。そして、イミュアルが使用している治療薬の大風子油をもらい、台湾へと向かった<sup>19</sup>。

馬偕医院で診察を開始したグッシュテイラーは、一般診療のかたわら、1925年2月25日よりハンセン病患者の診察を開始した。毎週土曜日朝8時から始まる診察には平均50～70名の患者が訪れ、グッシュテ

イラーは台湾語を用いて診察を行い、患者たちに1週間分の薬を患者に与えるといった治療を行った<sup>20</sup>。

#### 5. グッシュテイラーによる私立ハンセン病療養所の設立

グッシュテイラーは小冊子『台湾癩病撲滅計画』を発行し、その一部で自身の療養所計画を述べている。グッシュテイラーの理想の療養所は、一つの家に4人で暮らし、自らが食品を栽培し、養鶏や養豚などを行いというものだった。家庭的な生活を送れる療養所を建設し、ハンセン病患者を収容したいと考えていた<sup>21</sup>。

1928年2月6日、グッシュテイラーは淡水英国領事館のバットラーと台湾総督上山満之進を訪ね、宗教的ハンセン病救済事業への援助を請願した。これに対し、上山は財政が許す限りの援助を承諾した。これまでの社会貢献が認められ、1930年3月に25000円の補助金が台湾総督府より下付された。グッシュテイラーは、療養所建設用地を求めて30ヶ所以上もの場所を歩き回り、1931年6月23日、台北州淡水郡に療養所を建設することを決めた。同年11月2日に、台北州知事より私立ハンセン病療養所設置の許可を受け、同月30日には療養所名が「樂山院」と決定した<sup>22</sup>。

私立の療養所設立に向けて、計画は動き始めたが、療養所の建設情報を聞きつけた淡水の住民より建設を反対する運動が起った。グッシュテイラーは、反対住民らを淡水公会堂に集めて、ハンセン病についての説明を行い、人々に理解を求めた<sup>23</sup>。今回、私立療養所建設用地として選定された場所は、地理学的にも、衛生学的にも極めて安全な土地であり、グッシュテイラー自身も、近隣の住民に対し、悪影響が生じないことを判断した上でこの土地を選んでいった。さらに、フィリピン・クリオンハンセン病療養所の病理学長、カルカタ熱帯医学及び衛生学校ハンセン病研究所所長やアメリカ・カアベルハンセン病病院院長ら、世界の大家と呼ばれる人々に、療養所の位置や淡水など近隣の状況を伝えた上で、この土地に、療養所を建設することの是非を問い、世界の大家からも「問題なし」との見解を得ていた<sup>24</sup>。

それでもなお、住民側はハンセン病の療養所建設に納得ができず、グッシュテイラーに直接交渉を試みた。それに対し、グッシュテイラーは療養所建設に関しては、台湾総督府や台北州議会で可決した問題であり、既に療養所の建設工事も始まっており移転しようにも適当な場所が見つからない……との理由を述べ、住民たちの申し出を退けた<sup>25</sup>。療養所建設に伴う、グッシュテイラーと淡水住民との間の問題は、最終的には、台

北州知事が仲裁を行い解決した<sup>26</sup>。

1932年1月19日、台湾総督代理警務局長井上臨席のもと定礎式が行なわれ、療養所内の建物工事が開始された。翌2月26日には、指令515号によって財団法人として許可を受けている。それから2年後の1934年3月30日、台湾総督代理警務局長、知事、各国の領事、台湾総督府ハンセン病療養所楽生院院長、八里庄長、キリスト教関係者など、多くの人々が参加するなか、私立ハンセン病療養所楽山園の落成式が行なわれた。そして、翌月20日よりハンセン病患者の収容を開始した<sup>27</sup>。

ここでは、私立ハンセン病療養所ができる際に、台湾総督府や台北州知事など、植民地台湾内の中央機関及び地方機関が関与している様子を整理した。補助金など金銭的な側面にはじまり、住民との調停にいたるまで、行政機関が関わっている様子が確認できたであろう。

先に記したように、統治国日本では、法律が施行される以前は私立のハンセン病療養所による救済が積極的に行われていたが、法律施行後は、公立、国立の療養所が発展していき、ハンセン病の患者を収容する療養所は、基本的には、公立ないし国立の療養所へと移っている。私立ハンセン病療養所のほとんどが法律施行以前に建設され、法律施行後に建設された療養所が公立、国立である点からもこのことが確認できる。

しかし台湾の場合は、台湾総督府の療養所ができただ後に、私立のハンセン病療養所が台湾総督府のバックアップを受けて建設されたのである。この点は、日本統治期台湾ハンセン病対策の、注目すべき点の一つである。

## 6. グッシュティラーの海外視察

次に、グッシュティラーと海外視察と台湾総督府の補助について述べたい。

私立馬偕医院の院長であったグッシュティラーは、度々、海外のハンセン病施設の訪問に出向いている。1926年12月7日台湾総督府より、「南洋ニ於ける衛生施設に関する調査」を嘱託され、一時金として1000円が支給されている。視察に際して、グッシュティラーは台湾総督府官房調査課の勤務を命じられ、待遇は高等官6等相当であった<sup>28</sup>。

この高等官6等とはどれくらいの地位なのだろうか。後に、台湾総督府ハンセン病の療養所に勤務する台湾人医師頼尚和が医官として着任したときの等級が、高等官7等であり、その後、医長になったときの等級が高等官6等であった<sup>29</sup>。この状況から判断すると、グ

ッシュティラーは、府立ハンセン病療養所医長と同等の待遇で、海外視察を命じられていたことが確認できる。

その後、1929年にも同じように台湾総督府からの補助を受け、海外視察に出向いている。更に1937年4月には、翌年開催される国際癩会議の台湾代表として台湾総督府から委嘱されている<sup>30</sup>。国際癩会議とは、世界各地からハンセン病の大家が集まり、議論する、世界的規模の会議である。

当初この会議には、府立ハンセン病療養所の院長上川豊が出席する予定であった。しかし、当時すでに戦時下であり、「軍関係以外の海外出張を禁じ」る、状況にあった<sup>31</sup>。それゆえ、上川の出張は取りやめとなったのである。上川以外にも、府立医院などで皮膚科の治療に携わる医師は存在したが、上川と同じ状況にあったといえる。

そこで、台湾代表として名前が上がったのがグッシュティラーであった。先に示したように、グッシュティラーは海外調査の実績もあり、世界のハンセン病大家と呼ばれる人々とも親交があった<sup>32</sup>。

国際癩会議は、ハンセン病治療の最新情報を得る為には、重要な機会であり、台湾総督府としても、治療などに関する情報を収集する必要があったと考えられる。その担い手として、グッシュティラーが台湾代表に選ばれたのである。

帰国後、グッシュティラーは台湾総督府に国際癩会議及び、エジプトの熱帯衛生施設に関する報告書を提出している<sup>33</sup>。

海外視察から戻ったグッシュティラーは、自身の医院や療養所で治療を行う傍ら、視察などで得た知識や情報を台湾の人々に還元している<sup>34</sup>。その中には、日本国内の代表的なハンセン病政策一すなわち隔離政策とは異なる見解も含まれていた。グッシュティラーの見解を、台湾総督府関係者も認識していたはずである。なぜなら、グッシュティラーは、社会事業大会や『社会事業の友』など<sup>35</sup>、台湾の代表的な社会事業分野で自分の意見を発信しているからである。

それでも台湾総督府は、国際癩会議のような国際的舞台上にグッシュティラーを台湾の代表という形で参加させたのである。このような背景から考察し、台湾総督府はグッシュティラーのハンセン病救済を評価していたのであると考えられる<sup>36</sup>。別の角度から考察すると、台湾総督府は、自らの力のみでは得ることができない情報を、グッシュティラーという外国人を通じて得ていたのだといえる<sup>37</sup>。グッシュティラーは、ハンセン病対策を通じて、台湾と世界を結ぶパイプ役とな

っていたのである。

## 7. まとめにかえて

本報告では、説明が不十分ではあるが、台湾総督府と私立ハンセン病療養所ならびに、園長であるグッシュテイラーの関係について整理してきた。

外国人（クリスチャンミッション）が経営する療養所に対し、日本国内はもとより日本統治下の朝鮮においても批判的に捉えられるような状況が出現していたが<sup>38</sup>、台湾では、1930年に台湾総督府によるハンセン病療養所が完成した後に、外国人宣教師グッシュテイラーによる私立のハンセン病療養所が建設されている。台湾総督府は、私立療養所の設立に対し、阻止することなく支援しているのである。グッシュテイラーは収容施設を持ち得ないまでも、1925年より私立医院内でハンセン病患者のハンセン病患者の治療を開始し、さらに1927年からは、専門の治療室を設けて、積極的なハンセン病救済を展開してきた。こういった点を台湾総督府は療養所と同等のものとして評価していたのであろう。

台湾総督府から私立療養所に対する援助は療養所の建設にとどまらず、グッシュテイラーの海外視察にも及んでいる。グッシュテイラーは台湾総督府から補助を受け、台湾総督府ハンセン病療養所の位で記せば、医長と同等の待遇を受けて海外視察に出かけ、さまざま情報を台湾にもたらしたのである。グッシュテイラーが語るハンセン病対策には、統治国日本が掲げているハンセン病政策とは異なる内容も含まれていた。それでもなお、グッシュテイラーは台湾ハンセン病対策の代弁者として国際的な舞台で活躍し、台湾総督府は、外国人グッシュテイラーが活躍する場の一端を与えたのである。

台湾総督府と私立療養所（グッシュテイラー）の関係論から日本統治期台湾におけるハンセン病政策を整理すると、私立療養所（グッシュテイラー）の存在は、台湾ハンセン病政策の特徴の一つであるといえる<sup>39</sup>。

## 注

1. 本報告では、基本的には、ハンセン病という言葉を使用しているが、歴史的用語として、「癩」、「癩病」などといった言葉を使用している。また、台湾では現在もハンセン病を示す言葉として「癩病」という用語を使用している。
2. 解放出版社編『ハンセン病国賠訴訟判決 熊本地裁〔第一次～第四次〕』解放出版社、2001年、iii～iv、x ii～x iii。『朝日新聞』2001年5月12日。
3. 一例を挙げると、藤野豊『「いのち」の近代史 「民族浄

化」の名のもとに迫害されたハンセン病患者』かもがわ出版、2001年。清水寛『植民地台湾におけるハンセン病政策とその実態』永岡正己総合監修『戦前・戦中期アジア研究資料2 植民地社会事業関係資料集【台湾編】別冊(解説)』近現代資料刊行会、2001年。清水寛、平田勝政「解説」藤野豊編『近現代日本ハンセン病問題資料集成（補巻）』、不二出版、2005年。王文基「癩病園裡的異郷人：戴仁壽與台湾医療宣教」『古今論衡（9期）』、2003年。范燕秋『疾病、医学與殖民現代性・日治台湾医学史』稻郷出版社、2005年。陳文榮『台湾癩瘋病救助之父——戴仁壽小伝』北県文化局、2005年など。

4. 2005年10月25日に台湾勝訴、韓国棄却の判決が下された（『朝日新聞（夕刊）』、『毎日新聞（夕刊）』、『読売新聞（夕刊）』2005年10月25日）。3大新聞はどれも一面で、この結果を報道した。
5. 宗田昌人「台湾ハンセン病回復者の人権と楽生院取り壊し反対運動」『インパクション(150号)』、2006年。
6. 筆者が私立療養所の存在に注目している理由はもう一つある。台湾総督府立ハンセン病療養所楽生院の開院を促した理由として、光田健輔が第10代台湾総督伊澤多喜男宛に記した「台湾癩予防法制定ニ関スル意見書」の存在がある。多くの先行研究が、光田の意見書を契機に台湾の療養所建設が進められた点を指摘している。楽生院の院長であった上川豊の小伝によると、台湾に療養所が設立した直接のきっかけは、光田健輔が義弟の第11代台湾総督上山満之進に「救癩の急務」を伝えたことによるらしい。いづれにしても、台湾総督府立ハンセン病療養所の設立に、光田健輔の影響が及んでいることは間違いない。光田は伊澤宛の意見書の中で、クリスチャンミッションの存在を批判的に捉え、もし台湾に外国人宣教師によってハンセン病の療養所が設立された場合、「眼ノ上ノ腫瘍」となるであろうと述べている。しかし、台湾総督府は私立の療養所の設立を含め、多くの場面で関与しているのである。すでに、別項で述べているがこのような背景もあり、台湾総督府と私立ハンセン病療養所の関係に注目している。植民地台湾において光田が及ぼした影響も含め、今後も研究を進めていきたい（光田健輔「台湾癩予防法制定ニ関スル意見書」藤楓協会編『光田健輔と日本のらい予防事業—らい予防法五十周年記念—』藤楓協会、1958年、145～148頁。藤野豊、前掲書、356～357頁。清水寛、前掲書、165頁。清水寛、平田勝正、前掲書、3～4頁。范燕秋、前掲書、191頁。内田守編『仁術を全うせし人 上川豊博士小伝』東北新生園患者慰安会、1970年、23頁。拙稿「日治時期台湾癩病防治政策的発展」国史館台湾文献館編『第四届台湾総督府档案学術研究会論文集』国史館台湾文献館、2006年）。
7. 多角的な視点とは、ここでは、日本からと台湾からの二つの視点を指す。なお、駒込武氏が日本統治期台湾の文化政策および植民地主義について多角的な視点から分析をおこなっており、示唆を受けている（駒込武「『文明』の秩序とミッション—イングランド長老教会と十九世紀のブリテン・中国・日本—」近代日本研究会『年報・近代日本研究・19 地域史の可能性—地域・日本・世界—』山川出版社、1997年ほか）。

8. 1889 年神山復生病院、1894 年目黒慰廃園、1895 年回春病院、1898 年琵琶崎待労病院、1906 年身延深敬病院（昭和女子大学光葉博物館編『「モノ」が語りかけるハンセン病問題』昭和女子大学光葉博物館、2003 年、48 頁）。
9. 光田健輔『回春病室』朝日新聞社、1950 年、31～33 頁。
10. 『公文類聚』012-00 類-01765-100 巻 040500（国立公文書館所蔵）。
11. 1917 年聖バルナバ医院、1924 年鈴蘭病院（1931 年閉鎖）。
12. 1909 年北部保養院、全生病院、外島保養院、大島療養所、九州療養所、1917 年聖バルナバ医院、1924 年鈴蘭病院（1931 年閉鎖）、1930 年長島愛生園、1931 年宮古保養院、1932 年栗生楽泉園、1935 年星塚敬愛園、1938 年国頭愛楽園、1939 年東北新生園、1943 年奄美和光園、1944 年駿河療養所（昭和女子大学光葉博物館編、前掲書、48～50 頁）。
13. 日本国内のハンセン病政策については、藤野豊氏などに詳しい（『日本ファシズムと医療—ハンセン病をめぐる実証的研究』岩波書店、1993 年など）。
14. 台湾総督府警務局『台湾の衛生（昭和 14 年度版）』台湾総督府警務局衛生課、1939 年、5 頁。
15. ハンセン病療養所の設立は、1930 年。癩予防法施行は、1934 年である。
16. 中村不羈児「台湾に癩療養所の設置せらるるまで」『社会事業の友（27 号）』1931 年、152～153 頁。
17. 長野純蔵『台湾に於ける十年』私家版、1910 年、361～363 頁。
18. 「ジー、グミウ、テマラー南洋ニ於ケル衛生施設関スル調査事務ノ囑託一時手当」『台湾総督府公文類纂』冊号 4057 文号 83。
19. 陳文栄、前掲書、42～43 頁。清水寛、前掲書、214 頁。
20. 「台湾に珍しい癩病人の救主」『台湾日日新報』1926 年 3 月 9 日、3 月 10 日。
21. 戴仁壽『台湾癩病撲滅計画』私家版、発行日なし。
22. 当日の新聞には「楽山院」と記されている。誤字と思われるが、今後調査を行いたい。「新癩病院は楽山院と命名するに決す」『台湾日日新報』1931 年 12 月 3 日。財団法人私立楽山園『財団法人私立楽山園事業概要』財団法人私立楽山園、1937 年、4～5 頁。
23. 「癩療養所設置問題戴博士会淡水街民廿一日淡水公会堂」『台湾日日新報』1931 年 11 月 21 日。
24. ジーグシウテイラー『楽山園位置ニ関スル世界癩専門大家説明書』私家版、1931 年 12 月 5 日。
25. 「癩病院問題交渉遂に決裂す博士が拒絶して」『台湾日日新報』1931 年 12 月 25 日。
26. 「癩病院問題円満に解決す平山知事の斡旋で」『台湾日日新報（夕刊）』1931 年 12 月 29 日。
27. 「全島唯一の私立癩病院楽山園の落成式石垣総督代理ら臨席しきのふ盛大に挙行さる」『台湾日日新報』1934 年 3 月 31 日。財団法人私立楽山園『財団法人私立楽山園事業概要』財団法人私立楽山園、1941 年、5 頁。
28. 「ジー、グミウ、テマラー南洋ニ於ケル衛生施設関スル調査事務ノ囑託一時手当」『台湾総督府公文類纂』冊号 4057 文号 83。
29. 「頼尚和（任癩療養所医官；官等；俸給；勤務）」『台湾総督府公文類纂』冊号 10076 文号 57。および、「頼尚和（任台湾総督府癩療養所医長叙高等官六等；七級俸下賜；楽生院勤務ヲ命ず）」『台湾総督府公文類纂』冊号 10092 文号 25。
30. 財団法人私立楽山園、前掲書（1941 年）、5～6 頁。
31. 内田守、前掲書、29 頁。
32. 1931 年にフィリピンで開催された会議では、執行秘書を務めている（戴仁壽遺作、呉瑞松訳「台湾的反癩瘋工作紀要」秦賢次編『楽山五十』財団法人私立楽山療養院、1984 年、44 頁。清水寛、前掲書、215 頁）。
33. 財団法人私立楽山園、前掲書（1941 年）、6 頁。
34. 国際癩会議の報告会は 1938 年 11 月 10 日に台湾 MTL の主催で行なわれた（『台湾青年（103 号）』、1938 年、4 頁）。
35. ジー・グシウ・テイラー「癩病撲滅に就て」『社会事業の友（1 号）』、1928 年。ジー・グシウ・テイラー「国際連盟と癩」『社会事業の友（27 号）』、1931 年。
36. 戦後、楽生院院長の上川は回顧録の中で、グッシュテイラーのハンセン病救済を讃えている（上川豊「台湾総督府の救癩事業回顧 後編」『レブラ（21 巻）』、1952 年、264 頁）。
37. ちなみに、上川豊は、グッシュテイラーが参加した国際癩会議の情報を参考に、楽生院の患者に対し食餌療法を行ない、その結果を日本の雑誌に投稿している（上川豊「癩ノ食餌療法殊ニ摂取脂肪量ニ就テ」『皮膚科泌尿器科雑誌（54 巻）』、1943 年、167～168 頁）。
38. 滝尾英二『朝鮮ハンセン病史 日本植民地下の小鹿島』未来社、2001 年、52～54 頁。藤楓協会、前掲書、147 頁。
39. 本稿は、財団法人交流協会日台湾交流センター歴史研究者交流事業による成果の一部を含んでいる。また、台湾における研究は、中央研究院台湾史研究所でお世話になった。付して、お礼申し上げます。